入洛後の二陸について

佐藤利行

陸機・陸雲兄弟は、吳國滅亡後、舊里の華亭における、およそ十年間の退居ののち、相前後して入洛した。入洛後の二陸は、張華の知遇を得て、次第に北方の社會に同化していったが、北方の人士達のすべてが二陸を快く受け入れたわけではなく、そのほとんどが二陸に對して非常に冷淡な態度をとった。たとえば北方文壇の中心的存在であった潘岳なども、これと同じ立場をとっていたようである。

しかし、そのような狀況の下にありながらも、二陸は張華らの庇護を受けて、北方社會における自分達の足場を徐々に固めてゆき、そうして次には、彼らが中心となって、張華らの援助を仰ぎながら、同鄕の人士を次々と北方社會へ引き入れていった。こうして入洛してきた南方の人士達によって、二陸を中心に一つの集團が形成され、そこでは樣々な情報が交換され、また文學に關する議論も交されていたようである。

以下、このような入洛後の二陸と北方の文人達との關わりについて、さらには二陸を中心とした南方出身者集團の構成とその活動狀況などについて、私見を述べてみたい。

一

入洛してきた二陸に對し、北方の人士達の多くが、好意的でなく冷淡な態度をとったことについては、『世說新語』に見える以下の話が、それを如實に物語っている。

陸機詣王武子。武子前置數斛羊酪、指以示陸曰、卿江東何以敵此。陸云、有千里蓴羹、但未下鹽豉耳。

陸機、王武子に詣る。武子は前に數斛の羊酪を置き、指して以て陸に示して曰く、「卿の江東、何を以てか此に敵する」と。陸云ふ、「千里の蓴羹有り、但だ未だ鹽豉を下さざるのみ」と。（言語篇）

陸士衡初入洛、咨張公所宜詣。劉道眞是其一。陸既往、劉尙在哀制中。性嗜酒。禮畢、初無它言、唯問、東吳有長柄壺盧、卿得種來不。陸兄弟殊失望、乃悔往。

陸士衡、初めて洛に入り、張公に宜しく詣るべき所を咨ふ。劉道眞は是れ其の一なり。陸既に往くに、劉は尙ほ哀制の中に在り。性酒を嗜む。禮畢るや、初めより它言無く、唯だ問ふ、「東吳に長柄の壺盧有り、卿は種を得て來るや不や」と。陸兄弟は殊に失望し、乃ち往くを悔めり。（簡傲篇）

盧志於衆坐、問陸士衡、陸遜陸抗是君何物。答曰、如卿於盧毓盧珽。士龍失色。既出戸、謂兄曰、何至如此。彼容不相知也。士衡正色曰、我父祖名播海内。寧有不知。鬼子敢爾。

盧志　衆坐に於て、陸士衡に問ふ、「陸遜・陸抗は是れ君の何物ぞ」と。答へて曰く、「卿の盧毓・盧珽に於るが如し」と。士龍は色を失ふ。既に戸を出でて、兄に謂ひて曰く、「何ぞ此の如きに至る。彼は相ひ知らざる容し」と。士衡　色を正して曰く、「我が父祖　名は海内に播けり。寧んぞ知らざること有らん。鬼子　敢へて爾す」と。

（方正篇）

このような狀況のなかにあって、張華は二陸に對して非常に好意的であった。そのことは『晉書』陸機傳に、

至太康末、與弟雲俱入洛、造太常張華。華素重其名、如舊相識。曰、伐吳之役、利獲二俊。

太康の末に至り、弟の雲と俱に洛に入り、太常張華に造る。華は素より其の名を重んじ、舊くより相ひ識るが如し。曰く、「吳を伐つの役、利は二俊を獲しことなり」と。

とあることからも知られる。

そもそも張華は『晉書』本傳に、

華性好人物、誘進不倦。至于窮賤候門之士、有一介之善者、便咨嗟稱詠、爲之延譽。

華は性人物を好み、誘進して倦まず。窮賤候門の士に至りては、一介の善き者有れば、便ち咨嗟稱詠して、之が爲に譽れを延ぶ。

とあるように、進んで優秀な人材を推擧した。たとえそれが寒門の出であろうと、また南方出身者であろうと、張華は有能な人材を中央社會へ引き入れることに對し、甚だ積極的であった。ために張華は、亡國吳の出身である二陸をも、快く迎え入れたのである。また、『世說新語』文學篇注に引く『文章傳』には、

機善屬文。司空張華見其文章、篇篇稱善、猶譏其作文大冶。謂曰、人之作文、患於不才、至子爲文、乃患太多也。

機は善く文を屬る。司空張華は其の文章を見て、篇篇　善しと稱するも、猶ほ其の文を作るの大いに冶なるを譏る。謂ひて曰く、「人の文を作るや、不才に患ふに、子の文を爲るに至っては、乃ち太だ多きを患ふなり」と。

とあり、張華は陸機の文學面における才能を高く評價していたことが分かる。陸機の文名は、夙に北方社會においても知られていたようで、『文選』文賦注に引く臧榮緒『晉書』には、

年二十而吳滅。退臨舊里、與弟雲勤學、積十一年。譽流都華、聲溢四表。

年二十にして吳滅ぶ。退きて舊里に臨み、弟の雲と學に勤め、積むこと十一年。譽れは都華に流れ、聲は四表に溢る。

と、記されている。

さて、このような二陸の入洛に對して、北方文人達は、いかなる對應をしたのであろうか。此の點について、言わば南方文人の代表である陸機と、それに對して北方文人の代表とされる潘岳、すなわち西晉文學界の兩雄と目されていた陸機と潘岳との關わりを取り擧げてみよう。

陸機と潘岳の交わりを示す直接の資料は、潘岳が賈謐の代作をして陸機に贈った「爲賈謐作贈陸機」詩と、それに答えた陸機の「答賈長淵」詩が『文選』（卷二四）に收められているにすぎない。そもそも賈謐が陸機に贈る詩を、潘岳に作らせたということ自體、岳こそが北方

文人の代表であるという意識があったためと思われる。[1] 潘岳の詩は、太子洗馬から吳王晏の郎中令として赴任していた陸機が、尚書中兵郎として再び入朝した頃に陸機に贈られたもので、或いは賈謐のサロンを通じての作であったかもしれない。詩は全て十一章から成り、その第四章に次のような表現がある。

南吳伊何　　南吳は伊れ何ぞ
僭號稱王　　僭號して王と稱す

吳の孫權は、黄龍元年（二二九）に帝位に就いたが、そのことを潘岳は「僭號」と言ったのであり、ここには明らかに陸機に對する侮蔑の意圖が込められているように思われる。また、第十章には、

發言爲詩　　言に發して詩を爲り
俟望好音　　好音を俟ち望む

とあることから、潘岳の陸機に對する挑發とも思われ、潘岳より十五歲も年が若い陸機に對する、潘岳のあからさまな對抗意識が窺える。

また潘岳と陸機は、ともに賈謐の二十四友のメンバーであった。「二十四友」については『晉書』賈謐傳に、次のように記されている。

或著文章稱美謐、以方賈誼。渤海石崇・歐陽建、滎陽潘岳、吳國陸機・陸雲、蘭陵繆徵、京兆杜斌・摯虞、琅邪諸葛詮、弘農王粹、襄城杜育、南陽鄒捷、齊國左思、清河崔基、沛國劉瓌、汝南和郁・周恢、安平牽秀、潁川陳眕、太原郭彰、高陽許猛、彭城劉訥、中山劉輿・劉琨、皆傅會於謐、號曰二十四友。其餘不得預焉。

或いは文章を著して謐を稱美し、以て賈誼に方ぶ。渤海の石崇・歐陽建、滎陽の潘岳、吳國の陸機・陸雲、蘭陵の繆徵、京兆の杜斌・摯虞、琅邪の諸葛詮、弘農の王粹、襄城の杜育、南陽の鄒捷、齊國の左思、清河の崔基、沛國の劉瓌、汝南の和郁・周恢、安平の牽秀、潁川の陳眕、太原の郭彰、高陽の許猛、彭城の劉訥、中山の劉輿・劉琨は、皆な謐に傅會し、號して二十四友と曰ふ。其の餘は預るを得ず。

石崇・歐陽建・潘岳といった、いわば賈謐直系の人物の名が、その初めに示され、それに續いて陸機・陸雲の名が列ねられているように、潘岳・陸機は二十四友の中心メンバーであったことが分かる。

ところで當時、朝廷では『晉書』の起年をいつにするかという「晉書限斷」についての議論がなされていた。正史の編纂にとって限斷、すなわち何時のことから書き始めるかということは、重要な問題であった。朝廷では『晉書』の限斷に關して、これまでもたびたび議論が繰り返されていたが、惠帝の卽位後、再びそのことが議論された。このとき秘書監の職にあり、國史の編纂を掌っていたのが賈謐であった。『晉書』賈謐傳にはその時のことが、次のように記されている。

惠帝立、更使議之。謐上議、請從泰始爲斷。於是事下三府。司徒王戎、司空張華、領軍將軍王衍、侍中樂廣、黄門侍郎嵇紹、國子博士謝衡、皆從謐議。騎都尉濟北侯荀晙、侍中荀藩、黄門侍郎華混、以爲宜用正始開元。博士荀熙、刁協、謂宜嘉平起年。謐重執奏戎華之議、事遂施行。

惠帝立つや、更めて之を議せしむ。謐は議を上り、泰始より斷を爲さんことを請ふ。是に於て事は三府に下さる。司徒王戎・司空張華・領軍將軍王衍・侍中樂廣・黄門侍郎嵇紹・國子博士謝衡は、皆な謐の議に從ふ。騎都尉濟北侯荀晙・侍中荀藩・黄門侍郎華混は、以爲へらく宜しく正始を用て元を開くべしと。博士荀熙・刁協は、

宜しく嘉平もて起年とすべしと謂ふ。謐は重ねて戎・華の議を執奏し、事は遂に施行せらる。

此の時、二十四友の中心であった潘岳が、「晉書限斷の議」を作ったことが、『晉書』潘岳傳に記されている。

謐二十四友、岳爲其首。謐晉書限斷、亦岳之辭也。

謐の二十四友、岳は其の首たり。謐の晉書限斷も、亦た岳の辭なり。

これより前、陸機の方も、秘書監虞濬の著作郎として、「晉書限斷の議」を作っていたようで、『北堂書鈔』巻五七に引く王隱『晉書』には、次のようにある。

陸機字士衡、以文學、爲秘書監虞濬所請、爲著作郎、議晉書限斷。

陸機、字は士衡は、文學を以て、秘書監虞濬の請ふ所と爲り、著作郎と爲りて、『晉書』の限斷を議す。

いま、『初學記』巻二一に、以下のごとき陸機の「晉書限斷の議」の斷片を見ることはできるが、この中には『晉書』の起年については觸れられていない。

三祖實終爲臣、故書爲臣之事、不可不如傳、此實錄之謂也。而名同帝王、故自帝王之籍、不可以不稱紀、則追王之義。

三祖は實に終に臣たれば、故より臣たるの事を書し、傳の如くせざる可からず、此れ實錄の謂なり。而も名は帝王に同じければ、故より自ら帝王の籍あり、以て紀と稱せざる可からず、則ち王の義を追へり。

此の陸機の作っていた「晉書限斷の議」に對して、賈謐は新しく潘岳に「晉書限斷の議」を作らせたわけであり、ここにも南方出身者である陸機に對する北人の對立意識を窺うことができよう。さらに賈謐は、束晳を著作佐郎として、陸機の「晉書限斷」を非難させたことが、『北堂書鈔』巻五七に引く干寶『晉紀』に次のように記されている。

秘書監賈謐、請束晳爲著作佐郎、難陸機晉書限斷。

秘書監賈謐は、束晳に請ひて著作佐郎と爲し、陸機の「晉書限斷」を難ぜしむ。

このように、「晉書限斷」をめぐる賈謐・潘岳と陸機との關わりのなかにも、兩者の對立を見ることができるのである。

この潘岳と陸機との關係を、端的に示しているのが、『裴子語林』にある次の話である。

士衡在坐。安仁來、陸便起去。潘曰、清風至、塵飛揚。陸應聲答曰、衆鳥集、鳳皇翔。

士衡　坐に在り。安仁　來るや、陸は便ち起ちて去る。潘曰く、「清風至りて、塵飛揚す」と。陸は聲に應じて答へて曰く、「衆鳥集ひて、鳳皇翔る」と。

以上のごとく潘岳は、二陸、ことに兄の陸機に對して、彼が南方文人の代表であるということで、激しい對抗意識を持っていたようである。更にまた、潘岳の妻の父である楊肇が、吳の步闡の叛亂の際に、陸機の父である陸抗に敗れたということも、その一因であったろう。(2)

すなわち、『晉書』羊祜傳に據れば、吳の末に、晉に降った吳の步闡とその援軍の晉將楊肇が吳に攻め入った時、それを迎え擊ったのが陸抗であり、抗は闡を捕らえ肇の軍を擊破した。ために潘岳の岳父の楊肇は庶人におとされている。

陸機の方もこれに對して、自分こそが南方文人の代表であり、その

文學は決して北方文人に引けを取るものではないという強い自負を抱いていたのである。

二

陸機は入洛後、ほどなくして愍懷太子の洗馬となったが、その時、太子の舍人として潘岳の從子の潘尼も同じ職場にいた。潘岳が陸機にたいして對立的であったのに反し、潘尼の方は、陸機とは親しく交わっていたようであり、兩者の間には、しばしば詩のやりとりがあった。[3] それらの贈答詩を見れば、陸機と潘尼の交際の深さを窺い知ることができるが、潘尼の「贈陸機出爲吳王郎中令」詩（『文選』卷二四）に「予涉素秋、子登青春」（予は素秋を涉り、子は青春に登れり）というように、潘尼は陸機よりも十數歲年長であったが、二人はその年齡の差を越えた交際をしていたように思われる。

ところで、愍懷太子の府には、潘尼のほか馮熊（字は文羆）なる人物がいたが、彼も潘尼同樣、南方出身者のよき理解者であったようである。『文選』（卷二四）には、陸機の馮文羆の斥丘赴任にあたっての詩と、その後に贈られた詩とが收められている。

そもそも此の「馮文羆」とは、馮紞の子で、魏國出身の北方文人である。父の馮紞は、賈充・荀勖とともに吳を伐つことに反對し、張華とは政敵であった。このことについて『晉書』馮紞傳には、次のようにある。

初謀伐吳、（馮）紞與賈充荀勖、同共苦諫不可。吳平、紞內懷慚懼、疾張華如讎。及華外鎭、威德大著。朝論當徵爲尙書令。紞從容侍帝、論晉魏故事、因諷帝言、華不可授以重任。帝默然而止。

初め吳を伐つを謀るに、紞は賈充・荀勖と、同共に苦りに諫めて不可とす。吳平らぐや、紞は內に慚懼を懷き、張華を疾むこと讎の如し。華の外鎭に及ぶや、威德は大いに著はる。朝論　當に徵して尙書令と爲すべしと。紞は從容として帝に侍り、晉魏の故事を論じ、因りて帝を諷して言ふ、「華は授くるに重任を以てす可からず」と。帝は默然として止む。

また、『晉書』張華傳には、

初（張）華毀徵士馮恢於帝。紞卽恢之弟也。

初め華は徵士の馮恢を帝に毀る。紞は卽ち恢の弟なり。

とある。すなわち馮紞は、自分の兄である馮恢を、張華が帝に毀ったということで、個人的にも華を憎んでいたのである。しかるにその子の文羆の方は、張華同樣、南方出身者には好意的であり、たとえば吳國出身の顧榮が、身の處し方に窮したときも、それを馮文羆に相談し、文羆の方も顧榮のために盡力したということが、『晉書』顧榮傳に次の如く記されている。

齊王冏召爲大司馬主簿。冏擅權驕恣。（顧）榮懼及禍、終日昏酣、不綜府事。以情告友人長樂馮熊。熊謂冏長史葛旟曰、以顧榮爲主簿、所以甄拔才望、委以事機。不復計南北親疏、欲平海內之心也。今府大事殷、非酒客之政。旟曰、榮江南望士、且居職日淺。不宜輕代易之。熊曰、可轉爲中書侍郎、榮不失淸顯、而府更收實才。旟然之、白冏、以爲中書侍郎。在職不復飲酒。人或問之曰、何前醉而後醒邪。榮懼罪、乃復更飲。與州里楊彥明書曰、吾爲齊王主簿、恒慮禍及。見刀與繩、每欲自殺。但人不知耳。

齊王冏、召して大司馬の主簿と爲す。冏は權を擅にして驕恣なり。榮は禍の及ばんことを懼れ、終日　昏酣し、府事を綜べず。情を以て友人の長樂の馮熊に告ぐ。熊は冏の長史葛旟に謂ひて曰く、「顧

榮を以て主簿と爲すは、才望を甄拔し、委ぬるに事機を以てする所以なり。復た南北の親疏を計らずして、海内を平らげんとするの心あるなり。今、府は大いに事は殷んなり、酒客の政するに非ず」と。旟曰く、「榮は江南の望士にして、且つ職に居りて日は淺し。宜しく輕しく之を代易すべからず」と。熊曰く、「轉じて中書侍郎と爲す可くんば、榮は清顯を失はずして、而も府も更めて實才を收めん」と。旟は之を然りとして、冏に白して、以て中書侍郎と爲す。職に在りて復た酒を飲まず。人　或いは之に問ひて曰く、「何ぞ前には醉ひて後には醒むるや」と。榮は罪を懼れて、乃ち復た更に飲む。州里の楊彥明に書を與へて曰く、「吾、齊王の主簿と爲りてより、恒に禍の及ばんことを慮ふ。刀と繩とを見れば、毎に自殺せんと欲す。但だ人の知らざるのみ」と。

顧榮の置かれていた不安定な立場がよく表れているが、このような狀況にあって、心情を打ち明けることができるほどに、馮熊は顧榮から信頼されていたのであろう。そうしてその信頼は、顧榮のみならず、多くの南方出身者たちの共通のものであったに違いない。ために陸機とも深く交わることができたものと思われる。

このように、入洛してきた南人に對する强烈な風當たりのなかで、張華をはじめとして、數は多くはないけれども潘尼や馮熊など、南人に對して好意的であった人もいたのである。

三

さて、北方社會全體が、南方出身者を抑壓せんとしていた狀況の中にあって、當然のことながら、弱い立場にある南方出身者たちは、次第に集團を形成してゆくことになる。ために二陸は、南方出身者のよき理解者である張華らの庇護を受けながら、進んで同鄉の人士を北方社會へと引き入れていった。

たとえば、戴淵（字は若思）なる人物は、廣陵出身の南人であるが、陸機との出會いは、次の如くであった。

戴淵少時、遊俠不治行檢。嘗在江淮間、攻掠商旅。陸機赴假還洛、輜重甚盛。淵使少年掠劫。淵在岸上、據胡牀指麾左右、皆得其宜。淵既神姿峯穎、雖處鄙事、神氣猶異。機於船屋上遙謂之曰、卿才如此、亦復作劫。淵便泣涕、投劍歸機。辭厲非常。機彌重之、定交、作筆薦焉。

戴淵　少き時、遊俠にして行檢を治めず。嘗に江淮の間に在りて、商旅を攻掠す。陸機　假に赴きて洛に還るに、輜重甚だ盛んなり。淵　少年をして掠劫せしむ。淵は岸上に在り、胡牀に據りて左右を指麾し、皆な其の宜しきを得たり。淵　既に神姿峯穎にして、鄙事に處ると雖も、神氣は猶ほ異なり。機は船屋の上より遙かに之に謂ひて曰く、「卿が才　此の如くして、亦復た劫を作すか」と。淵は便ち泣涕し、劍を投じて機に歸す。辭の厲しきこと常には非ず。機は彌〻之を重んじ、交りを定め、筆を作りて焉を薦む。

（『世說新語』自新篇）

戴若思の才を認め、共に洛に入った陸機は、彼を趙王倫に推薦したが、その時の牋は『晉書』戴若思傳に收められている。

ところで陸雲の書翰の中に次のような記述がある。

近聞若思、未有通塗、每用於邑。

近ごろ聞くに若思は、未だ通塗有らず、毎に用て於邑すと。

（「與戴季甫書」其五）

これに據れば、陸雲も同鄉の戴若思の就職に心を配っていたというこ

とが分かる。また、戴若思に關する次のような書翰もある。

戴會稽、如是便發、分別恨然。一時名士、唯當有此君耳。失分重勞、令人歎息。善得日夕、眞家人。若思・望之、清才俊類。一時之彥、善並得接。九月中、可得達東禮。衡陽・長沙甚快、東人近未復有見敍者。公進屈久、恒爲邑罔。黨方有清塗、薄國讓、在內中、大有好稱。此家一時美德也。在事又佳。甚快甚快。

戴會稽は、是の如くして便ち發し、分別してより恨然たり。一時の名士、唯だ當に此の君有るべきのみ。分を失ひ重ねて勞すれば、人をして歎息せしむ。善く日夕を得ば、眞に家人なり。若思・望之は、清才ありて俊類なり。一時の彥にして、善く並びに接せらるるを得たり。九月中、東に達して禮するを得可けん。衡陽・長沙は甚だ快なるも、東人、近ごろ未だ復た敍せらるる者有らず。公は進屈すること久しく、恒に爲に邑罔たり。黨し方に清塗有らば、國讓に薄り、內中に在りて、大いに好稱有らん。此の家は一時の美德なり。事に在りても又た佳ならん。甚だ快なり　甚だ快なり。

（「與楊彥明書」其六）

書き出しの「戴會稽」とは、戴若思の父の戴昌のことと思われる。その戴昌が、職に就くことができず、郷里の廣陵に歸ってしまったことを、陸雲が嘆いているのである。手紙では、さらに戴昌の二人の子、若思・望之について觸れ、二人は清才があり立派な人物で、どちらも（上の者に）よく目をかけてもらっており、九月中には東へ歸って、郷里の廣陵で、父子の對面が可能であろう、というのである。「戴若思」に關して言えば、陸機の方は、それを趙王倫に推薦し、その一方で、陸雲は同郷の人士と連絡を取り合うということがあったのであろう。

ところで、此の手紙の相手である「楊彥明」も、『晉書』顧榮傳にある次の記述によって、會稽出身の人であることが知れる。すなわち、

時南土之士、未盡才用。榮又言、……會稽楊彥明・謝行言、皆服膺儒敎、足爲公望……。

時に南土の士、未だ盡くは才として用ひられず。榮は又た言ふ、「……會稽の楊彥明・謝行言は、皆な儒敎を服膺し、公望を爲すに足る……」。

この楊彥明に關しては、陸雲の彼宛ての書翰に、次のように言う。

雲白。欽明去書不悉。彥先來得書、以爲慰。時去苒荏、歲行復半。悲此推移、終然何及。漸已欲熱、想自如常。悠悠守限、良談未日。眇然東望、思以敍至。及反憒罔不多。行矣愛德。往來相聞。

雲　白す。欽明　書を去るも悉さず。彥先　來りて書を得、以て慰めと爲す。時の去ること苒荏たるも、歲の行くこと復た半ばなり。此の推移を悲しむも、終然に何ぞ及ばん。漸已く熱くならんと欲るも、想ふに自ら常の如からん。悠悠として限を守り、良談　未だ日あらず。眇然として東望し、以て敍の至らんことを思ふ。反するに及んで憒罔多からざらん。行け　德を愛せよ。往來　相ひ聞せよ。

（「與楊彥明書」其一）

此のなかで、「遙か遠く東の方（會稽）を望んでは、任命書の到らんことを思っております」といい、同じく「與楊彥明書」其三では、

階塗尙否、通路今塞、令人惘然。名論允進、遠而有光者。

階塗は尙ほ否にして、通路は今や塞がれ、人をして惘然たらしむ。名論は允に進むも、遠くして光有る者なり。

すなわち「官吏に就く道はやはり閉ざされ、世に出る道は今や塞がれてしまい、私をがっかりさせております。評判は非常に高いのです

が、遠く地方にいて輝いている者です」と、その任官がなかなかうまくゆかないことについて、洛にいる陸雲が、吳にいる楊彥明にその狀況を說明しているのであるが、同鄕人に對する陸雲の心遣いがよく表れている。この楊彥明なる人物はそのまま任官されることがなかったようで、これは永嘉元年（三〇七）の頃のことであるが、先にも擧げた『晉書』顧榮傳のなかで、「會稽の楊彥明・謝行言は、皆な儒敎を服膺し、公望を爲すに足る」と、やはり吳國出身の顧榮が、楊彥明を推薦している。

次に、「石行文」なる人物について見てみよう。陸雲の張華宛ての書翰（「與張光祿書」其三）に、次のようにある。

加蒙顧遇、重以傾倒。惟亮歸誠。石行文、敦素篤邃、道實茂淑。器敏既美、思學又快。南州良德、今者東行。望風自託、其意繾綣。願厚接納。副其乃心。

顧遇を加蒙へられ、重ねて以て傾倒せらる。惟れ亮に誠を歸す。石行文は、敦素　篤邃にして、道實　茂淑なり。器敏は既に美にして、思學も又た快なり。南州の良德にして、今者は東行す。風を望んで自ら託し、其の意　繾綣たり。願はくは厚く接納されんことを。其れ乃心に副はん。

同じく陸雲の戴季甫宛ての書翰（「與戴季甫書」其七）にも、石行文の名が見える。

石行文在無錫、大有清績、一州之高功長吏。此家行素道實、州閭所稱。疇昔接事、既盡其才。願重榮益、以成其實。

石行文は無錫に在り、大いに清績有り、一州の高功の長吏なり。此の家は行素　道實にして、州閭の稱する所なり。疇昔より事に接し、既に其の才を盡くす。願はくは榮益を重ね、以て其の實を成さんことを。

これらの書翰からみて、石行文は無錫にいて、州の役人をしている同鄕人のようであるが、その人を陸雲が中央政府に推薦しようとしているのである。「戴季甫」なる人物は、彼宛ての陸雲の全七首の書翰を見るに、張華同樣、中央政府の要職にあり、南方出身者に目をかけていた人らしく思われる。すなわち陸雲が、石行文の就職について、張華・戴季甫らに、その依賴をしているのである。

このように入洛後の二陸は、北方社會における自らの立場が安定してゆくにつれ、ここに取り擧げた戴淵・楊彥明・石行文といった人を北方社會に導き入れていったのと同じように、南人たちを次々と北方社會へ引き入れていったのである。そうして入洛した南人は、すでに洛陽にる南人たちと力を合わせ、また新しい南人を北方社會へと導き入れてゆくのである。もちろん、洛陽における南人の中心となって活躍していたのは二陸であるが、彼ら以外にも南方出身者の世話をしていた南人はいたわけで、例えば、二陸と俱に入洛した顧榮（字は彥先）なども、その一人であった。すなわち、『晉書』顧榮傳には次のようにある。

顧榮、字彥先。吳國吳人也。爲南土著姓。祖雍、吳丞相。父穆、宣都太守。榮機神朗悟、弱冠仕吳、爲黃門侍郎、太子輔義都尉。吳平、與陸機兄弟同入洛、時人號爲三俊。

顧榮、字は彥先。吳國・吳の人なり。南土の著姓爲り。祖は雍、吳の丞相たり。父は穆、宣都太守たり。榮は機神　朗悟、弱冠にして吳に仕へ、黃門侍郎、太子輔義都尉と爲る。吳の平らぐや、陸機兄弟と同に入洛し、時人は號して三俊と爲す。

此の顧榮も、二陸同樣、張華に世話になったようで、陸雲がそのこと

を張華に感謝しているのが、次の書翰である。

顧令文・彦先、毎宣隆眷、彌泰之惠。懷德惟慙、守以反側。既晞仁風、委心自昵。

顧令文・彦先、毎に隆眷を宣べられ、彌泰の惠みあり。德を懷ひて惟に慙ぢ、守るに反側を以てす。既に仁風に晞され、心を委ねて自ら昵む。

（「與張光祿書」其二）

このように、張華ら南人のよき理解者の援助によって、北方社會の仲間入りをした顧榮は、次には陸機たちと力を合わせて、南人を北方社會へと引き入れてゆく。すなわち、

顧榮・陸機・陸雲、表薦（賀）循曰、伏見吳興武康令賀循、德量邃茂、才鑒清遠。服膺道素、風操凝峻。歷踐三城、刑政肅穆。守職下縣、編名凡萃。出自新邦、朝無知己、恪居遐外、志不自營。年時倏忽、而邈無階緒。實州黨愚知、所爲悵然。臣等並以凡才、累授飾進、被服恩澤、忝豫朝末。知良士後時、而守局無言、懼有蔽賢之咎。是以不勝愚管、謹冒死表聞。

顧榮・陸機・陸雲は、表して循を薦めて曰く、「伏して見るに吳興武康令の賀循は、德量　邃茂にして、才鑒　清遠なり。道素を服膺して、風操　凝峻なり。三城に歷踐し、刑政　肅穆たり。職を下縣に守り、名を凡萃に編めり。新邦より出づれば、朝に知己無く、遐外に恪居して、志は自ら營まず。年時　倏忽として、而も邈かにして階緒無し。實に州黨愚知の、悵然たる所なり。臣等　並びに凡才なるを以て、累りに飾進を授かり、恩澤に服せられ、忝くも朝末に豫れり。良士の時に後るるを知り、而も局を守りて無言なるは、懼らくは蔽賢の咎有らん。是を以て愚管に勝へずして、謹んで死を冒して表聞す」。

（『吳志』賀邵傳注引虞預『晉書』）

これは、顧榮が陸機や陸雲と俱に、賀循を推擧した時の上表文である。「新邦より出づれば、朝に知己無し」というところに、南方出身者の置かれた立場がよく表れている。此の上表によって、賀循は程なくして中央に召しだされ太子舍人となった。このようなことは、數も少なく立場も弱い南方出身者達が、北方社會で生活してゆくためには、當然の行動であったといえよう。

さて、こうして入洛してきた南人達は、二陸を中心に結束し集團を形成してゆくが、二陸を中心に南方出身者が集まっていたことについては、『晉書』吾彥傳に次のように記されている。

會交州刺史陶璜卒、以（吾）彥爲南中都督、交州刺史。重餉陸機兄弟、機將受之。雲曰、彥本微賤、爲先公所拔、而答詔不善。安可受之。機乃止、因此每毀之。長沙孝廉尹虞謂機等曰、自古由賤而興者、乃有帝王、何但公卿。若何元幹・侯孝明・唐儒宗・張義允等、並起自寒微、皆內侍外鎭、人無譏者。卿以士則答詔小有不善、毀之無已。吾恐南人皆將去卿、卿便獨坐也。

會〻交州の刺史陶璜卒し、（吾）彥を以て南中都督・交州刺史と爲す。重ねて陸機兄弟に餉り、機は將に之を受けんとす。雲曰く、「彥は本と微賤にして、先公の拔く所と爲るに、而も詔に答ふること善からず。安んぞ之を受く可けんや」と。機は乃ち止め、此れに因りて每に之を毀る。長沙の孝廉尹虞、機等に謂ひて曰く、「古より賤よりして興る者、乃ち帝王有り、何ぞ但に公卿のみならんや。何元幹・侯孝明・唐儒宗・張義允等の若きは、並びに寒微より起こり、皆な內に侍し外に鎭たるも、人の譏る者無し。卿は士則が詔に答ふるに小しく善からざる有るを以て、之を毀りて已む無し。吾は、南人の皆な將に卿を去らんとし、卿の便ち獨り坐するを恐る」と。

すなわち、陸機の吾彦（字は士則）に對する冷たい態度について、長沙の孝廉であった尹虞が「吾は、南人の皆な將に卿を去らんとし、卿の便ち獨り坐するを恐る」と注意したということから、此の時すでに陸機を中心として、南方出身者が多く集まっていたことが推測される。

そうしてその集團では、小さな事をあまり氣にしない反面、氣性の激しい所のある陸機は、

雲性弘靜、怡怡然爲士友所宗。機清厲有風格、爲鄉黨所憚。

雲は性は弘靜にして、怡怡然として士友の宗ぶ所と爲る。機は清厲にして風格有り、鄉黨の憚る所と爲る。

（『世說新語』賞譽篇注引『文士傳』）

とあるように、仲間の者からは一目おかれていたようであるが、兄とは性格の違う雲はそれをうまく取り成し、とかく表立った行動をとる陸機の蔭にかくれて、上手に同鄉人をまとめていたのであろう。

四

このように、二陸や顧榮を中心とした、北方社會における南方人士の集團が次第に形成されてゆくなか、鄉里の吳においては陸典という人物を中心に、その結束が圖られていた。恐らく、そこでは陸典を中心として、吳の人材を北方社會へと送り出すための機關が作られていたのであろう。そうして吳の陸典が、洛陽の陸雲と連絡を取り合いながら、しかるべき人材を北方へと送り出していたものと思われる。次に擧げる書翰は、陸雲がその陸典に宛てたものであるが、これに據れば、陸典が鄉里の吳にあり、洛陽の陸雲と連絡を取り合っていた狀況がよく分かる。

雲再拜。自曠但爾、已復經時。限制長路、惟親未期。嗇近晨風、傾匡結言。來誨綢繆、篤眷彌隆。誦玩千周、以當侍會。靜言莫瞻、翹翹仰慕。大人汜愛、在我尤弘。每銜思戀、何時去心。限此省省、願言用替。遙瞻靈丘、感時情傷。往來信理。自更繼情。如有信、唯不玉音。

雲　再拜。自ら曠くして但だ爾り、已に復た時を經たり。長路に限制され、親を惟ふも未だ期あらず。晨風を嗇近し、匡を傾け言を結ぶ。來誨　綢繆にして、篤眷　彌〻隆し。誦玩すること千周、以て侍會に當つ。靜言するも瞻る莫く、翹翹として仰ぎ慕ふ。大人の汜愛は、我に在りて尤も弘し。每に思戀を銜み、何れの時か心を去らん。此に限られて省省たり、願に言に用て替らんとす。遙かに靈丘を瞻み、時に感じて情は傷む。往來　信に理あり。自ら更に情を繼がん。如し信有らば、唯に玉音なるのみにあらず。（「與陸典書」其一）

陸雲が「大人」と呼ぶところからみて、陸典は陸雲のおじにあたる人と思われる。また同じく陸典宛ての別の書翰の中に、

華亭之望、以大人爲宗主。

（「與陸典書」其十）

華亭の望みは、大人を以て宗主と爲す。

とあるように、陸典を中心に陸氏一族、ひいては吳國の人士が結束していたようである。陸雲が、その陸典と絕えず連絡を取り合っていたということは、次に擧げる二つの書翰によっても分かる。

雲再拜。亘卿前行陵、有小事。惟以具聞。事已大了。猶以爲願、令仁士光・令遠公然兄弟、屢數常存思想。想令遠分好、已爲綢固。彥恩復蒙誘掖耳。無因覲對、言不盡心。屢垂誨、以慰遠思。雲再拜。

雲　再拜。亘卿は前に陵に行き、小事有り。惟ふに以に具に聞せん。事は已に大ぼ了る。猶ほ以て願ひと爲すは、行々歸るを取らんと欲ることを。別れの方に至らんことを念ひ、豫め以て愍然たり。相ひ見ふ毎に、未だ嘗て大人を以て言を爲さずんばあらず。想ふに令仁士光・令遠公然の兄弟は、屢數常に思想に存せん。想ふに令遠は分好、已に綢固を爲す。彥恩は復た誘掖を蒙らんのみ。覲對するに因無く、言は心を盡くさず。屢々誨へを垂れて、以て遠思を慰められよ。雲　再拜。

（「與陸典書」其七）

雲再拜。亘卿在臺、高譽洋溢。洛邑之內、無不欽敬。東南之貴寶、眞不但會稽之篠簜也。每會常共歌詠、信無一面不歎吟也。想方周旋携手、散今日之思耳。雲再拜。

雲　再拜。亘卿は臺に在り、高譽　洋溢たり。洛邑の內、欽敬せざる無し。東南の貴寶は、眞に但に會稽の篠簜のみならざるなり。會する毎に常に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無きなり。方に周旋して手を携へ、今日の思ひを散ぜんことを想ふのみ。雲　再拜。

（「與陸典書」其八）

前者は、亘卿なる吳國出身者が、鄕里に歸りたいと思っていること、またその亘卿と會うたびに、陸典のうわさをしているということが前半に述べられ、後半では、已に入洛している士光と公然、すなわち陸機の從弟の陸曄（字は士光）兄弟についての狀況報告などが記されている。後者では、前の書翰に見えた亘卿が、中央にあって甚だ評判がよいことを述べ、また「會する毎に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無きなり」と、洛陽にいる南方出身者が、しばしば集まっては詩を詠じていることを記している。このような南人の集會は、しばしば行なわれたようで、陸雲の「與楊彥明書」其二には、

各爾永鬲、良會毎闕。

各爾　永く鬲たるも、良會は毎に闕なり。

とあり、また「與戴季甫書」其六にも、

在此會同、毎言高重武陵。

此に在りて會同しては、毎に武陵を高重せんことを言ふ。

とあって、そこでの話題は、やはり南方出身者の動向が中心であったようである。「武陵」については、陸雲の「與戴季甫書」其四に、

武陵於荆州、云多人士。聞周孟子・伍令明・潘世長諸人、並爲美德。心常依依。今日遭遇、良驥展才之秋也。不審達者凡有幾人。無因聽承誨語、咨稟未聞。毎懷勤企。表不盡言。

武陵は荆州に於いて、人士多しと云ふ。周孟子・伍令明・潘世長の諸人、並びに美德を爲すと聞く。心　常に依依たり。今日の遭遇は、良驥　才を展ぶるの秋なり。達者は凡そ幾人有るかを審かにせず。誨語を聽承するに因無く、咨稟　未だ聞せず。毎に勤企を懷ふ。表するも言を盡くさず。

とあり、周孟子・伍令明・潘世長といった人達の名を列擧して、陸雲がそれを戴季甫に推薦している。

また、陸雲の「與楊彥明書」其二には、

重存往會、益以增歎。

重ねて往會を存ひ、益々以て歎きを增す。

とあり、陸雲が吳にいた頃も、仲間が集まることがあったようである。そうしてそのような集會は、洛陽では陸機を中心に、吳では陸典を中心に持たれていたらしく、陸雲の「與陸典書」其二にある「數會同邪」（數々會同するや）という記述からも、そのことが分かる。

以上、見てきたように、入洛後の二陸は、北方社會における南方出

身者に對する壓力の中で、張華ら、よき理解者の援助を仰ぎながら、次第に北方社會へ同化していったようである。そうして次には、吳にいる陸典と連絡を取り合いながら、同鄕の人士を次々と北方社會へ引き入れ、二陸を中心に南人の集團が結成されていったのである。このような行動を取った二陸には吳國の名家たる誇りと、祖國のためにという强い意識があったと思われるが、そのことは、潘岳の詩（「爲賈謐作贈陸機」詩）に答えた陸機の「答賈長淵」詩のなかに、

吳實龍飛　吳は實に龍のごとく飛び
劉亦岳立　劉も亦た岳のごとく立つ

とあることからも窺うことができるし、また陸雲が陸典に宛てた書翰（「與陸典書」其五）のなかの、

吳國初祚、雄俊尤盛。今日雖衰、未皆下華夏也。

吳國　初めて祚るや、雄俊　尤も盛んなり。今日　衰へたりと雖も、未だ皆は華夏に下らざるなり。

という言葉が、如實にそのことを物語っているように思われる。

五

ところで、北方社會における南人の會合の中では、就職をはじめとする樣々な情報が交わされていたようであるが、そこではまた、文學に關する議論も展開されていたように想像される。そのことを暗示するのは、先にも擧げた次の書翰である。

每會常共歌詠、信無一面不歎吟也。

會する每に常に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無きなり。（「與陸典書」其八）

南人が集まっては詩を作り、その詩を批評し合うといったようなことがあったのではなかろうか。そうして、このような文學に關する議論の場には、南人だけではなく、時には北方文人も加わることもあったようである。たとえば、南人のよき理解者であった潘尼（字は正叔）は、陸機の作った詩を陸雲から與えられ、いたく感心したということを、次のように陸雲が陸機に告げている。

一日見正叔、與兄讀古五言詩。此生歎息、欲得之。

一日、正叔に見ひ、兄の讀古五言詩を與ふ。此の生　歎息し、之を得んと欲するなり。（「與兄平原書」其四）

同じく陸雲の兄宛ての書翰に、次のように言う。

間在洛、有所視。已當赦、而比更隆。以今意觀文、見此眞更以爲不盡善。文鼎云、故日向人歎兄文、人終來同。殆以此爲病。間ろ洛に在りて、視る所有り。已に當に赦すべきに、比ろ更に隆んなり。今の意を以て文を觀るに、此れを見れば、眞に更に以て善を盡くさずと爲す。文鼎云ふ、「故日　人に向ひて兄の文を歎ずるに、人　終に來同す」と。殆ど此を以て病と爲す。（「與兄平原書」其二十一）

すなわち、やはり南人に好意的であった馮熊（字は文鼎）が「以前、人々に陸機の文章を稱嘆したところ、皆も賛同してくれた」と言った、というのである。

また次の書翰は、湯仲なる人物が『楚辭』の「九歌」を稱嘆するのを聞いたことを思い出し、以前は『楚辭』を讀んでも、あまり好きではなかったが、近頃はすばらしいものに思われるということを、陸雲が兄の機に言ったものである。

雲再拜。嘗聞湯仲歎九歌。昔讀楚辭、意不大愛之。頃日視之、實自清絕滔滔。故自是識者。

雲　再拜。嘗て湯仲の「九歌」を歎ずるを聞けり。昔『楚辭』を讀むも、意大いには之を愛まず。頃日之を視るに、實自に清絶滔滔たり。故自り是れ識者ならん。（「與兄平原書」其十三）

「湯仲」については、『魏志』衛覬傳注に引く『潘岳別傳』に、「尼從子滔、字湯仲」とあり、潘尼の從子の潘滔であることが分かる。

このような、南方文人と北方文人との接觸は、相互の文學に少なからぬ影響を與えたと思われる。ことに、陸機の文章は當時すでに高い評價を得ていたと考えられ、そのことは次に擧げる資料によっても窺い知ることができる。すなわち『太平御覽』巻五九九に引く『抱朴子』に、

歐陽生曰、張茂先・潘正叔・潘安仁、文遠過二陸。或曰、張潘與二陸爲比、不徒步驟之間也。歐陽曰、二陸文詞源流、不出俗檢。歐陽生曰く、「張茂先・潘正叔・潘安仁は、文は遠かに二陸に過る」と。或ひと曰く、「張・潘は二陸と比を爲すに、徒に步驟の間のみにあらざるなり」と。歐陽曰く、「二陸の文詞の源流は、俗檢を出でず」と。

とあり、また、『世說新語』文學篇には、次のようにある。

孫興公云、潘文爛若披錦、無處不善。陸文若排沙簡金、往往見寶。

孫興公云ふ、「潘の文は爛なること錦を披るが若く、處として善からざるは無し。陸の文は沙を排して金を簡ぶが若く、往往にして寶を見る」と。

このように、陸機の文章は、北方文人の代表とされる潘岳の文章と比較されるほどに注目されていたわけで、北方文人にとっては、大きな刺激となったに違いない。

入洛後の二陸は、もとより張華の庇護によって北方社會へ登場していったわけであるが、二陸のほかにも、成公綏・束晳・左思・陳壽といった人たちが、張華に認められた文人達であり、そこには張華を中心として一個の文人集團が構成されていたものと推測される。[5] このうち成公綏・束晳は北人ではあるが寒門出身であり、左思は齊國の出、陳壽は蜀に仕えていた人物というように、二陸を含め、もともと權力の中心にあった人たちではない。いわば權力の周邊にいた者が、張華の知遇を得て、文壇に登場してきたと言ってもよい。そうして彼らは張華を中心として、詩文を作り文學論を展開していたのであろう。

以下に擧げる陸雲の兄機への書翰は、あるいは、そのような中でのことであろうか、二陸と張華とが、文學に關して議論をしていたことを窺わせるものである。

往日論文、先辭而後情、尙絜而不取悅澤。嘗憶、兄道張公父子論文、實自欲得。今日便欲宗其言。

往日　文を論ずるや、辭を先にして情を後にし、絜を尙びて悅澤を取らず。嘗に憶ふ、兄の、張公父子の論文は、實自に得んと欲すと道ふを。今日、便ち其の言を宗ばんと欲す。（「與兄平原書」其十一）

これは、文章における情の大切さを、陸機の語る張華についての言葉によって、雲が氣付いたということを、機に傳えたものである。

張公文無他異、正自情省無煩長。作文正爾、自復佳。

張公の文は他異無きも、正自に情省にして煩長無し。作文　正に爾らば、自ら復た佳なり。（「與兄平原書」其二十一）

これも張華の文章がすっきりとして、ごたごたとしたところが無いから素晴らしいのである、ということを言ったものである。また、次の書翰は押韻についてのものである。

音楚、願兄便定之。兄音與獻彥之屬、皆願仲宣、須賦。獻與服繁。張公語雲云、兄文故自楚、須作文、爲思昔所識文。乃視兄作誄、又令結使說音耳。兄所撰、願且可付之。此有書者、更校善書。

音は楚なれば、願はくは兄　便ち之を定せよ。兄の音は獻・彥の屬と、皆な仲宣を願ひ、賦に須む。獻と服とは繁たり。張公　雲に語りて云ふ、「兄の文は故自り楚なれば、須く文を作るには、爲に昔識す所の文を思ふべし」と。乃ち兄の作りし誄を視て、又た結をして音を說かしむるのみ。兄の撰する所、願はくは且く之を付す可し。此に書せし者有るも、更め校せし善書なり。

（「與兄平原書」其十五）

このような議論を通して、陸機の文章も、次第に北方文人の影響を受けていったということが考えられる。

ところで、梁・鍾嶸の『詩品』では、潘岳の詩について「其の源は仲宣に出づ」といい、張華についても「其の源は王粲に出づ」という。また王粲（字は仲宣）については「其の源は李陵に出づ。愀愴の詞を發し、文は秀づるも而も質は羸し」と述べ、李陵は「其の源は楚辭に出づ。文に悽愴多く、怨む者の流れなり」と評されている。つまり『楚辭』に基づく「悽愴」「愀愴」なる要素を受け繼ぐ者として、潘岳や張華を『楚辭』系の詩人と鍾嶸は捉えているものと思われる。これに對して、陸機については「其の源は陳思に出づ」といい、陳思すなわち曹植は「其の源は國風に出づ。骨氣は奇高、詞彩は華茂なり」と評されており、陸機を『詩經』系の詩人に位置付けている。當時、北方文壇に於いては、その華やかな要素を『楚辭』に求めていたために、『詩品』では此のように捉えられているのであり、また、かかる文壇の風潮を、劉勰の『文心雕龍』では「晉世の群才、稍や輕綺に入る」（明詩篇）、或いは「魏晉は淺にして綺なり」（通變篇）と評しているのであろう。儒敎の傳統的な學問を繼承し、文學面に於いては『詩經』を基本においていた陸機にとって、北方文壇に於けるこのような流れは、それまであまり意識していなかった南方の文學『楚辭』を改めて見直させる契機になったものと思われる。そうして陸機ら南人は、北方文壇におけるこのような時流に乘るべく心を配っていたのではあるまいか。そのことは例えば先にも擧げた陸雲の書翰（「與兄平原書」其十五）に、

音楚、願兄便定之。兄音與獻彥之屬、皆願仲宣、須賦。

とあり、これは陸雲が、兄や獻・彥（南方出身者の名であろう）らは王粲の賦のような音を願っているが、自分の作品についても音が合うように韻字を改めて欲しい、というのであり、これに據って、陸機ら南人は王粲の作品を參考にして北方文人の好む音をマスターしていったことが分かるが、つまりそれは、陸機らが王粲に取り入れられた『楚辭』的要素を學ぼうとしたものと考えることもできる。

さらに陸雲の書翰では、王粲の文章を取り上げて、次のような議論を展開している。

雲再拜。仲宣文如兄言、實得張公力、如子桓書、亦自不乃重之。兄詩多勝其思親耳。登樓賦無乃煩感丘。其弔夷齊、辭不爲偉。兄二弔自美之。

雲　再拜。仲宣の文は兄の言の如く、實に張公の力を得たるも、子桓の書の如きは、亦た自ら乃ち之を重んぜず。兄の詩は多く其の「思親」に勝るのみ。「登樓の賦」は乃ち「感丘」より煩なること無からんや。其の「弔夷齊」は、辭は偉と爲さず。兄の二弔は自ら之

より美なり。

（「與兄平原書」其十一）

すなわち、王粲の文章は、兄上の言う通り、張華の高い評價を得ているが、子桓の書ではそれを重んじていないという。そうして王粲の「思親詩」「登樓賦」「弔夷齊文」などを持ち出しては陸機の詩文と比べ、批評を加えているのである。ここに言う「子桓」とは曹丕すなわち三國・魏の文帝の字であり、「子桓書」とは、その「與吳質書」（『文選』巻四一）のことをいう。その書のなかで曹丕は「仲宣續自善於辭賦。惜其體弱、不足起其文。至於所善、古人無以遠過」（仲宣は續いて自ら辭賦を善くす。惜しむらくは其の體弱くして、其の文を起こすに足らず。善くする所に至りては、古人も以て遠く過ぐる無し）と言っており、張華が『楚辭』的要素を詩文の中に繼承している王粲を高く評價するのに對し、陸雲は文帝の評語を持ち出して、張華の意見に異を唱えているようである。王粲の文章について、陸雲は更に次のようにも言っている。

視仲宣賦集、初述征登樓、前却甚佳、其餘平平。不得言情處、此賢文、正自欲不茂。不審兄呼爾不。

仲宣の賦集を視るに、初めの述征・登樓は、前却く甚だ佳きも、其の餘は平平たり。情を言ふを得ざる處は、此の賢の文、正自に茂ならざらんとす。兄の爾呼ぶや不やを審かにせず。

（「與兄平原書」其三十一）

これらの書翰に據れば、陸雲は陸機ほどには王粲を評價していなかったようであるが、ともあれ二陸ら南方出身者たちが張華ら北方文人を介して、王粲の作品における『楚辭』を踏まえた內容や表現を學んでいたということは、それが入洛後の南人の文學に少なからぬ影響を與えたものであったことを證するに足るものであろう。

かかる北方文人との關わりの中で、『詩經』を內容や表現の基本として踏まえ、傳統的な形式を繼承していた陸機の詩文は、『楚辭』を中心とした北方の文學の影響を受けて、徐々に洗練され華やかさを帶びてゆき、また陸機の『詩經』を基本とした傳統的な詩文は、華やかさを『楚辭』に求めていた潘岳ら北方文人に、『詩經』を再認識させることにもなったと思われる。

梁の沈約は「宋書謝靈運傳論」（『文選』巻五〇）の中で、

降及元康、潘陸特秀。律異班賈、體變曹王。縟旨星稠、繁文綺合。綴平臺之逸響、采南皮之高韻。遺風餘烈、事極江右。

降りて元康に及ぶや、潘（岳）陸（機）は特り秀づ。律は班（固）賈（誼）に異なり、體は曹（植）王（粲）に變ず。縟旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ。平臺の逸響を綴り、南皮の音韻を采る。遺風餘烈、事は江右に極まれり。

と述べているが、前代とは趣を異にする潘・陸の詩文は、南方文學と北方文學とが相互に影響を及ぼし合った結果、生み出されたものであろうか。これら南方文人と北方文人との文學に關わる影響關係の詳細については、稿を改めて述べてみたい。

注（1）高橋和巳「潘岳論」（『中國文學報』第七册）參照。
（2）興膳宏『潘岳陸機』（筑摩書房・中國詩文選）參照。
（3）拙稿「二陸と潘尼」（『安田女子大學紀要』第二十號）參照。
（4）陸雲の書翰は、四部叢刊本『陸士龍文集』に收めるものを用い、『百三家集』『全晉文』および中華書局本『陸雲集』を參考した。
（5）林田愼之助「魏晉南朝文學に占める張華の座標」（『日本中國學會報』第十七集）參照。